

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 14日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22390416

研究課題名（和文） 看護師のリフレクション能力を開発するためのプログラム構築に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental Research on Development of Program to Promote Nurses' Ability for Reflection

研究代表者

佐々木 幾美（SASAKI IKUMI）

日本赤十字看護大学・看護学部・教授

研究者番号：90257270

研究成果の概要（和文）：本研究では、看護師のリフレクション能力を開発するためのプログラム構築を目的に、省察的対話を展開するセッションとして、9名の看護師を対象に1回/月、約4か月間の継続的なインタビューを、のべ41回実施した。結果、看護師が、一連のセッションを通して気がかりへの取り組み方が変化する過程が見出された。その変化の過程は【省察的対話での気づき】と【実践の場での省察的対話を意識した試み】を繰り返しながら深化していた。さらに参加者への思考の影響として、【継続的省察的対話と実践の繰り返しによる気づき】が特徴づけられた。本セッションの体験がリフレクション能力の獲得に有用であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This research describes development of program to promote nurses' ability for reflection. For the purpose, consecutive sessions on reflective conversation were conducted with 9 nurses over 4-6 month period (once a month per nurse, a total of 41 interviews). We found that the process by which nurses dealt with their concerns changed during the course of the sessions. The change consisted of 'noticing things through reflective conversation' and 'trying to put into practice the points talked about in the conversation,' which were deepened by repeating the cycle. Additionally, participation in the sessions influenced the thinking of the nurses in terms of 'awareness through the repetition of ongoing reflective conversations and nursing practice'. The present results suggest that the sessions were effective in promoting nurses' ability for reflection.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2011年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2012年度	2,700,000	810,000	3,510,000
総計	7,100,000	2,130,000	9,230,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：看護教育学、リフレクション、省察的対話、セッション

1. 研究開始当初の背景

今日の医療技術の進歩や人々の価値観の多様化から質の高い看護が社会から求められている。こうした社会的要請に応えるためには、看護職者の継続的な学びと成長が不可欠である。看護学教育が生涯教育とされ、継続教育の重要性が指摘されているが、看護実践能力を高めていくためには実践状況の中で学びを深めていくことが重要である。

こうした中、実践の重要性を説き、実践状況への取り組みとその経験から学ぶ試みとして、「リフレクション (reflection)」が注目されている。Schön (1983)は、不確実で複雑な実践状況に取り組む専門家の専門性がリフレクションそのものにあるとし、実践の最中にふりかえりを行う「行為中の省察

(reflection-in-action)」と実践を事後的に振り返る「行為後の省察(reflection-on-action)」という2つのリフレクションを駆使することで、難題の解決に取り組んできたことを示した。さらに、これら2つのリフレクションによって、状況の認識や行為を修正しながら実践に取り組む様相を「反省的実践 reflective practice」とした。この Schön の提唱したリフレクション能力を高めることが看護者の実践能力の向上に寄与する可能性がある。

リフレクション能力を高めるためには、看護者が実践状況における自己の経験に向き合い、「実践から学ぶ」機会を意図的に準備する必要があるが、現状の継続教育のプログラムではそのような機会は乏しい。先行研究として、専門看護師のリフレクションプロセスや中堅看護師のリフレクションの要素・構造の解明を試みる研究(池西・田村、2008)がみられるが、リフレクション能力を発展させるようなプログラムについての研究はない。また、院内教育におけるリフレクションを活用した実践報告では、ファシリテーターの育成が課題として挙げられており(小竹、2009)、リフレクション能力を開発するプログラム構築の課題は急務である。本田(2003a、2003b)は、「反省的対話」によって「行為中の省察 (reflection-in-action)」と「行為後の省察 (reflection-on-action)」が相互に進展するという構造を明らかにしている。本研究はその結果に基づいて、反省的対話をどのように活用するか、それによってリフレクションがどのように進展するか、看護実践状況がどのように変化するかを実証的に明らかにし、そこからファシリテーターの役割を抽出し、プログラムの構築に向けて基礎的研究を行うことを目的とした。

2. 研究の目的

本研究では、リフレクションの能力を進展させるプログラムの開発を目的と

し、以下3つの研究課題を設定した。

(1) 研究課題1：国内外の文献からリフレクション、反省的実践、省察的対話等の特徴を浮き彫りにする。

(2) 研究課題2：省察的対話を展開するための継続的な面接から、参加者のリフレクションに関わる思考の変化や特徴を記述する。

(3) 研究課題3：省察的対話を展開する継続的な面接の中での参加者自身が認識した影響を記述する。さらにファシリテーターの関わりを記述し、プログラムの構築を目指す。

3. 研究の方法

(1) 文献検討

国内外の文献を収集し、反省的実践の定義、リフレクションの促進に影響する要因などについて、研究者間で検討を行った。また、リフレクションを教育実践に活用しているワークショップに参加し、実践的観点での情報収集を行った。

(2) リフレクションの進展と看護実践状況の変化プロセス

経験年数5年以上の看護師を対象に、1回/月程度の半構成的面接を4~6か月間継続的に実施した。継続的な面接は同一の研究者と参加者が1対1の関係を維持するように設定し、参加者の気がかりとなった事象を基軸にし、気がかりとなった状況、その時の参加者の思考や感情、行動などを振り返るような形で実施した。2回目以降は気がかりとなった事象への取り組みなどについても確認するようにした。面接に際して、現在看護実践を行ううえで気がかりとなっていることについて、事前に気がかり場面記入用紙に記載を依頼し、記載内容を参考にし、インタビューガイドに基づいて用いて行った。気がかり場面記入用紙は、記入自体が参加者の負担とならないよう配慮し、必須とはしなかった。ここでの参加者の思考の特徴や変化について木下の修正版グラウンデッドセオリーアプローチ法で分析を行った。

倫理的配慮として、参加者に本研究の趣旨、研究参加の自由意思、データの匿名性の確保などを文書と口頭で説明し、同意を得た。また、研究代表者が所属する倫理審査委員会の承認を得て研究を実施した。

(3) 省察的対話を展開する継続的なセッションによる影響

研究課題(2)を明らかにする研究方法としては、研究参加者自身が継続的な面接の中で影響を受けていると語る内容に、省察的対

話の要素が含まれていることが推察された。そこで、これを教育プログラムに応用しうるかどうかが検討するための基礎的研究を行った。

具体的には、省察的対話が展開できるセッションとして、①継続的な面接は同一の研究者と参加者が1対1の関係を維持するように設定し、参加者の気がかりとなった事象を基軸にし、気がかりとなった状況、その時の参加者の思考や感情、行動などを振り返るような形で実施すること、②2回目以降は気がかりとなった事象への取り組みなどについても確認するようにした。面接に際して、現在看護実践を行ううえで気がかりとなっていることについて、事前に気がかり場面記入用紙に記載を依頼し、記載内容を参考にし、インタビューガイドに基づいて用いて行うこと、を設定した。

このセッションが研究参加者にとってどのような影響があったのかを探求する方法として、毎回のセッションの開始時に前回のセッションの影響を確認し、一連のセッションの最終回に全体のセッションを通じた影響について確認する試みを行った。インタビュー内容は“研究者との省察的対話の中で印象に残ったことや看護実践に対する考え方などで変化したことや影響を受けたこと”とした。

分析方法は、看護師自身が影響を受けたと語っていることについて解釈し、意味内容の類似性を検討しカテゴリー化をはかった。

さらにファシリテーターの関わりを記述し、プログラムの構築の可能性について検討をした。

4. 研究成果

(1) 文献検討

国内文献については、医学中央雑誌 Ver.5 データベースを用いて、リフレクションをキーワードに原著論文を対象に、文献を検索した。その結果、30件の文献が抽出された。うち、看護教員(実習指導者を含む)を対象にしたものが12件であり、看護学生を対象にしたものが10件、看護師を対象としたものは8件であった。

海外文献については、CINAHL データベースを用いて、reflection をキーワードに文献を検索した。その中で、本研究に関係しそうな44件の文献について検討をした。

(2) 研究参加者の概要

9名の看護師を対象とした。インタビューは一人当たり4-6回、のべ41回実施した。看護師の経験年数は5~19年(平均9.22±4.49)であった。

(3) リフレクションの進展と看護実践状況

の変化プロセス

「反省的対話」によって「行為中の省察 (reflection-in-action)」と「行為後の省察 (reflection-on-action)」が相互に進展するという結果(本田, 2003a, ; 本田, 2003b)に基づいて、状況や周囲の人々との反省的対話によってリフレクションがどのように進展するか、看護実践状況がどのように変化するかを検討した。

リフレクションの進展と看護実践状況の変化は、まず「自己への気づき」があり、その後「気がかりへの取り組み」を行い、その「取り組みへの成果を感じる」という流れがあった。リフレクションが進展していく際の思考の特徴は、気がかりの種類やそれまでの看護師が持つ経験によりいくつかの様相があることもうかがえたが、教育プログラムを構築していく上では、リフレクティブな対話によって研究参加者にどのような変化が起こるのかの具体を踏まえる必要があった。そこで、「自己への気づき」が丹念に繰り返された思考の特徴からみたリフレクションが進展する様相について以下に述べていく。

① 「自己への気づき」

大半は、初回のインタビューにおいて、【自分以外の状況への関心】が語られた。そして、インタビューが進むにあたり、【気がかりに対する思考】と【自己に対する省察】とを繰り返していた。【自分以外の状況への関心】からはじまった気がかりは、<他者や周囲の状況に対する気がかり>を感じる事が多く、それらに対して<情緒的な反応>がみられるという特徴があった。

数回のインタビューを経る中で、看護師の思考は【気がかりに対する思考】と【自己に対する省察】がくり返し展開されていた。それは、どちらか一方のみ展開されるというよりは、面接者との対話を通して、気がかりな状況・事象とそこに向かう自己の双方に対する思考が展開されていた。

【気がかりに対する思考】は、<同様の気がかりが生じたときの対応の検討>をし、<問題になっていることへの直接的なかかわりの回避>をする様子があり、徐々に<より奥にある気がかりへの到達>に至るというプロセスを経ていた。それと同時に、【自己に対する省察】は「私は決してアセスメントを間違っていないというか。伝え方が悪かったなというところもあるんですけど、あの症状を見た時に緊急性はないなと思ってはいた」という語りにもみられる<自分の状況に対する正当化や言い訳>をしながらも、「そうですね。ちょっと八方美人なところもあるので、嫌われたくないというのが多分あるんだと思います。」と語られた<自分の好ましくない行動・性向への気づき>が表現された。さらに、「自分が頑なになっていたなってい

うのは外来に来て思います。もっと自分が柔軟性を持たないと吸収もできないだろうなと思って」というように<自己分析の進展>が見られ、「私、すごい毒舌なんです。とっさに何も考えずにポツと言ったことがすごく相手を傷つけたり、イラッとさせて、いいことないなということが最近わかったので」という語りにもられる<奥底にある自分への接近>をしていくというプロセスがあった。

② 「気がかりへの取り組み」

①で述べたプロセスである、【気がかりに対する思考】と【自己に対する省察】を繰り返す中で、研究参加者は【課題に取り組む決心】を語っていた。

③ 「取り組みの成果を感じる」

②のような気がかりと自己に対する思考が展開されることで、次の思考が生じていた。それは、<自分の課題や大切にしたい価値観の発見>ということである。この発見を通して、【課題に取り組む決心】である<自分の課題に取り組もうという決心>を表明するというプロセスが示された。さらに、面接と実践を繰り返す中では、【取り組んだ成果の実感】を得て、当初の気がかりを【学びとしての捉えなおし】としていくこと、つまり「気がかりを意識する重要性への気づき」と、「学びの機会として捉えなおす」という思考が展開されていた。

以上から、自分の周囲に対する気がかりが自己分析とともに進展し、自らの中核的な課題へと集約していく様相が、リフレクションに関わる思考の特徴として明らかとなった。また、見出した課題へ何らかの方法で取り組むことによって、周囲に対する変化や取り組みの成果が実感でき、そのことがさらなるリフレクションを生み出していると考えられた。また、参加者の語りからは、面接を重ねるなかで面接者との対話を継続的に行うことにより、自己との対話と気がかり事象との対話が同時進行で展開されていたことが示された。同時進行で展開されることにより、問題の本質に近づき、その問題に取り組む決心をして、実践での看護行為もしくは他者との対話へと向かうというダイナミックな様相を呈していた。

(4) 省察的対話を展開する継続的なセッションによる影響

研究成果(3)の検討を踏まえ、省察的対話が展開できるセッションが研究参加者にとってどのような影響があったのかを探求した。

本セッションに参加した看護師に生じた影響として、彼らの思考と取り組みが変化する過程として記述された内容を以下に述べ

ていく。

① 省察的対話での気づき

参加者自身の内面的な影響として、【省察的対話での気づき】が示された。セッションに参加した2回目頃から、「自分でもわからない状況を人に説明したことで客観的になれた」という語りに代表されるように、自分自身を<客観視する>ようになったと語られた。また、徐々に「前に比べ人の行動が気になることから、自分の中のあつというものが気になることが増えた気がする」など、<自己の変化に気づく>ようになったことが語られた。さらに、これまでなんとなく過ごしていた臨床の場面について、「いい面からのとらえ方もできるようになった」など、<状況が異なって見える>ようになったことが語られた。

② 実践の場での省察的対話を意識した試み

参加者自身の実践への影響として【実践の場での省察的対話を意識した試み】が示された。最初は、セッションで話されたことが常に心の中に残り、「インタビューで口にしたことを気に留めて行動していた」というように、<対話の内容を気に留める>ようになったと語られた。次第に実践の場で「自分の言ったことを意識して行動するようになった」という語りに代表されるように、<対話で言ったことに取り組む>ようになった。そして、取り組んだ結果に対して、「実際に働いているときも、ちょっと冷静になって考えてみようという時間を意識して、患者と向き合うようになったと思っている」と語られたように、<できている実感をする>ようになった。さらに「うまくいかなかったときにイライラの原因を自分に問い、自分の対応を省みるという対応ができるようになり楽になった」など、<意図的に取り組む>ようになったと語られた。

③ 継続的省察的対話と実践の繰り返しの気づき

研究参加者のリフレクションへの影響として、「自分の傾向とか自分の課題というか、悩んでいることがはっきりしてきたように感じた」というように<自分の傾向や思考のパターンに気づく>ようになり、「ちょっと成長したなと思う」というように<自己の成長を自覚する>ことが語られた。また、「昔の熱い気持ちを思い出して、後輩に伝えたいとか、もっと患者にやってあげたいという気持ちになった」というように<看護実践への関心を高める>ことが実感でき、「面談で聞いてもらって自分で考えるという関わりの中で学べたので、今後は他者ともっと対話していこうという考えが生まれた」というように<リフレクションのやり方を体得する>といったことが語られた。これらは【継続的

省察的対話と実践の繰り返しによる気づき】であり、参加者がこのセッションから省察的対話の方法を学び、実践の場において実際に試みていたことも明らかとなった。

【省察的対話での気づき】と【実践の場での省察的対話を意識した試み】という変化はそれぞれが影響しあい、繰り返されながら、深化していたことが描かれた。その中で【継続的省察的対話と実践の繰り返しによる気づき】につながっていくという関係が見出された。

以上のことから、本セッションに含まれる「研究者との省察的対話ののちに看護実践に取り組み、再度同一の研究者との省察的対話をする」という reflection-in-action と reflection-on-action を繰り返す体験が、有用であることが示唆された。またリフレクションを展開する能力の獲得にとって、①継続的な省察的対話と実践を繰り返すこと、②気がかりが明確になり、その課題に取り組み、結果が得られること、③対話をするのは同一のパートナーであること、④記録用紙を通して過去の出来事と気がかりとを統合していくことという4点が重要であることが示された。

ファシリテーターの関わりとして、気がかりとなっている現象の内容と一連のプロセス、その特徴を浮き彫りにできるような問いかけや確認が重要であること、自分の行為や考えの理由を問われるような質問が思考の展開に影響していることが示された。また、良く耳を傾けて共感的な態度を示してくれること、利害関係がなく責められない、明確な成果を求められないという安心感が素直に語りを展開する上で重要であることも明らかになった。

今後の課題として、リフレクションに関わる思考をファシリテートするものは何かについて、さらに分析を進め、今回のセッションをプログラムとして発展できるように検討する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計2件)

- ① 福田美和子、Influence exerted on the thinking of clinical nurses by repetitive sessions of reflective conversation, The 16th East Asian Forum of Nursing Scholars, 2013年2月21日、The Emerald Hotel (Bangkok, Thailand)

- ② 西田朋子、看護師のリフレクションに関わる思考の特徴—継続的なインタビューを通して—、第31回日本看護科学学会学術集会、2011年12月1日、高知市文化プラザかるぼーと (高知)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐々木 幾美 (SASAKI IKUMI)
日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：90257270

(2)研究分担者

朝倉 京子 (ASAKURA KYOKO)
東北大学・医学研究科・教授
研究者番号：00360016

福田 美和子 (MIWAKO FUKUDA)
東邦大学・看護学部・准教授
研究者番号：80318873

松山 友子 (MATUYAMA TOMOKO)
東京医療保健大学・看護学部・教授
研究者番号：30469978

西田 朋子 (NISHIDA TOMOKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・講師
研究者番号：20386791

本田 多美枝 (HONDA TAMIE)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授
研究者番号：40352348

唐澤 由美子 (KARASAWA YUMIKO)
長野県看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：40277893

濱田 悦子 (HAMADA ETUKO)
日本赤十字看護大学・看護学部・教授
研究者番号：10208580

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

石塚 敏子 (ISIDUKA TOSIKO)
新潟医療福祉大学・健康科学部・講師
研究者番号：80339944

小手川 良江 (KOTEGAWA YOSIE)
日本赤十字看護大学・看護学部・助教
研究者番号：90341544

平木 民子 (HIRAKI TAMIKO)

香川県立保健医療大学・看護学部・准教授
研究者番号：60308286